介護・福祉・在宅領域

看護師職能委員会Ⅱ だより

2023.9 第6号

「生きる」を支える ～グループホーム編～

認知症対応型共同生活介護 グループホーム陽気　施設長 杉山慎太郎

［運営理念］晴天の心で陽気ぐらし

すべての人が老人になっても、長寿を嘆かなくてもいいように、家庭的な生活を通して支援の必要な老人の心身の介護・ケアにつとめ、陽気ぐらしを目指します。

グループホーム陽気の運営理念にある、「陽気ぐらし」とは、互いにたすけ合って、周りの人々と、共に喜び共に楽しむ暮らしをしていく、という意味合いを持ちます。人が生まれて死ぬまで幸せに暮らすために必要なものは、人と繋がり、助け合い、働き、人が喜んでいる姿に共に喜び共有しながら生きていくことだと考えています。入居者・職員に限らず、自分や自分の家族と、お互いの気持ちを尊重しながら過ごせる場として、地域の中にグループホーム陽気が存在できていたらと思います。当施設は日本で唯一、運営者の自宅とグループホームが一体化しており、入居する方を文字通り家族として受け入れております。私の祖父や祖母、父、母も一緒に住んでいるため、24時間安心して過ごせる環境を提供しております。春には、母の趣味であるバラが咲き乱れ、オープンガーデンもしております。庭木の剪定は、100歳を超える祖父が今でも行っており（勝手に登ってしまう）、見ているこちらの寿命が縮まりそうです。看取りも行っているため、最後まで安心して住み続けることのできる施設を目指しております。

知らぬ間に100歳祖父が剪定開始

グループホーム陽気

正月のおせちと
グループホーム在住の魚達

祖母と孫（施設長）とひ孫（施設長の兄の子）の食事介助

【発行】公益社団法人長野県看護協会 看護師職能委員会Ⅱ

その人らしい生き方を支える

最期まで寄り添える幸せを感じて

介護支援センターあゆみ　髙池光恵

『こんなんやって母ちゃんの手を握って逝けたら幸せだねー』とおどけて話してくれたその方は、金婚式を迎えられ、奥様そして子供さん、お孫さん達と写真屋さんで最後の写真を撮ってもらい、その時が徐々に近くなっていました。ご本人が長年お世話になってきた信頼できる主治医のもと、訪問看護を中心に、奥様やご家族の不安や今後起きる状態の変化等お伝えして準備しておりました。家業を継いでいる息子さんや娘さんにも、何かあったら第一報は訪問看護へ連絡頂くようお伝えしていました。その頃、知人やご親戚の方々の訪問が続いておりました。

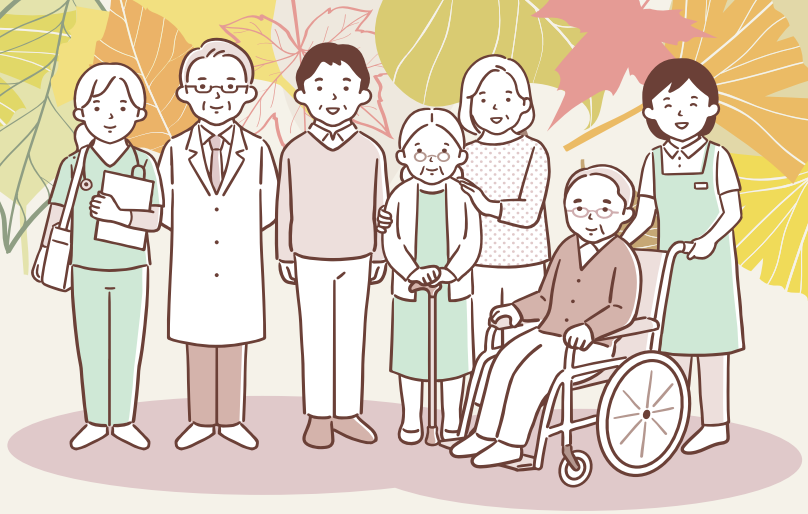
ご本人が希望するように、自宅で最期を迎えられると、誰もが信じていました。

しかし、ご本人やご家族の思いを十分知らない親戚の方が救急車を呼び、受け入れ先の病院で死亡診断を受け、その日のうちに帰宅されました。

私は、長野市の東側にある「介護支援センターあゆみで、介護支援専門員（ケアマネ）をしています。併設する施設や病院はなく、訪問看護を中心とし、ケアマネとヘルパー事業所があります。事業所は小さいですが、その分自由です。ご利用者様やご家族様に寄り添い、本当に必要なサービスの選択肢を提示することに努めています。ターミナル、難病、重度の認知症、独り暮らし等様々な背景を持たれている方を担当させて頂いています。

自宅でどのように過ごしていきたいかという思いを知り、ご家族が本人の希望通りに看取りができたことに納得安堵され、それからの生きる糧となっていると感じられた時、やりがいを感じています。反省することも多いですが・・・

始めにあげた出来事は、今もなお思いを巡らせている症例です。比較的お元気な時から関わらせて頂いている介護支援専門員として、その方にあったACPへの取り組みが必要であることを痛感しています。



宅老所の看護師として在宅で看取りを支えること

ぐるり株式会社宅老所花うた　認知症看護認定看護師　中村祐希

国の施策では、「できる限り住み慣れた環境で暮らし続ける」としていますが、宅老所は高齢者が利用しているので、急な入院で亡くなったり、身体機能が低下して施設に入ってしまったりすることも多くあります。自宅で最期まで暮らし続けることは現実には難しいと感じています。

その中でも私が思うことは、看護師として高齢者に関わり１日でも長く宅老所に通って来てもらうことです。当施設では、看護師が２～３名勤務しています。高齢者のバイタルチェックをはじめ、皮膚や爪の観察やケア、マッサージ、内服薬の確認、排便コントロール、家族への助言など、看護師の力を発揮する場面が多くあります。

先達て、亡くなった 97 歳の A さんは、宅老所に約５年通ってきました。できる限り介助歩行と普通食を食べてもらうことを意識していました。去年くらいから徐々に身体機能が落ち、医師から「そろそろ宅老所も厳しいのではないか」との言葉に娘さんも同意し、同事業所の訪問看護に切り替えました。私も訪問看護師に様子を尋ねたり娘さんと電話で話をしたりしていました。２か月ほどではありましたが訪問看護師や医師の協力で自宅で暮らし、朝、娘さんが顔を見に行くと亡くなっていたそうです。葬儀では、宅老所で撮った写真が飾られ娘さんは「これでよかったのかな」と言いましたが、自宅で最期を迎えられてよかったと思っています。90 歳を過ぎても長く宅老所に通ってきてくれたこと、最期まで私たちにケアさせてくれたことに感謝したいと思います。

利用者さんと一緒に食事作り

レクリエーション（ドミノ倒しの風景）

看取り期における家族との関わりを通して考えること

県内老人保健施設　看護師

90歳代後半の男性、90歳代の妻と二人暮らし。るい痩が進行し、寝たきり状態で数ヶ月の入院を経て施設入所となる。入院中から徐々に食事量は減少し、退院数日前からほとんど食事が摂取できない状況。病院から家族に状況を説明されていたが、お子さん達（以下「子」）から「父はそういう性格だから」など理解されていないと思われる返答があったとのこと。

入所当日食事は「もういらない」「食べられない」と拒否強く、摂取出来ず。

2日目施設医より妻へ「食事が摂れない。県外在住の子と一緒に今後どうしていくか話し合ってほしい。」と説明があった。

3日目妻と子へ、食事が摂れず、命の危険性があることを説明するが、子からは「お腹が空いていないので、食べられないのでは？」「食事の認識がないのでは？」との返答と食事介助の希望あり。子の介助でも水分1口で拒否し払いのける状況だが、「お腹が空けば食べられるのでは？」「点滴は本人が嫌がるので」と話される。

4日目子より再び食事介助の希望あり、朝食より介助に来られるも、摂取できず。施設医より妻と子へ「脱水・腎機能も悪化し、生命に関わる状態」と説明したところ、点滴の希望があり開始。その夜、永眠。施設医より「老衰です」と説明され、家族「わかりました」と話される。

施設はコロナ禍で面会制限中でしたが、食事介助を通じて現状を理解できればという職員の思いもあり、家族の希望通り食事介助を行って頂きました。家族は、退院することが出来たという思いがあったのでしょうか？退院前～入所時は看取り期で、家族に受け入れる感覚はなく、施設における看取り期の同意も得られないまま亡くなりました。家族が理解されるには時間が短かった事もありますが、どのようにすればよかったのかと今も考えています。

2022年度から「在宅看取り語りの場」を開催しています

～「在宅看取り語りの場」とは訪問看護師が地域の皆さんと在宅看取りについて語り合う場所です～

訪問看護師が体験した在宅看取りについて語り
地域の皆さんにも**自身が体験した介護や看取りについて**語ってもらいます。
お互いの体験を語り合いながら、在宅看取りの不安や苦労だけではなく、
喜びや達成感、その人らしく最期まで暮らせることへの幸せを知ってもらう場です。

【参加された方の声】

訪問看護で24時間対応してくれるなんて安心だね

あの時の私の介護、あれで良かったんですね

また参加したい！

今日のこと、息子にも話してみる

私も夫を家で看取りたいって思いました

訪問看護利用すると在宅で最期まで暮らせるかも…

お問い合わせ：長野県看護協会　訪問看護総合支援センター　090-1990-8469(直通)

看護師職能委員会Ⅱ委員

吉澤　美保・丸山　美由生・藤田　千恵・杉山　慎太郎・東上　真紀・髙池　光恵・中曾祢　澄子・橋爪　まゆみ
（2023年6月）松村　正子・中島　千夏